**課題①**

**直山視学官の評価に関する動画を視聴してレポートにまとめてください。**

①評価は教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことが出来るようにするためにも学習評価の在り方は重要であり、一貫性のある取り組みを行うことが求められているということが分かった。 評価をするにあたり、評価をしない領域があることを知った。それは、書くこと、読むことである。また、文法的に正しいのか、音声、発音などの正確さも評価には含まれていないことを理解する必要がある。小学校で、初めて英語に触れた子どもたちに対し、読んだり書いたりすることを評価する意義はないに等しい。指導要領にも、小学校は文構造、中学校は文法と記載されており、小学校では文法は扱わないこととされている。しかし、子どもの文法的な間違いをスルーするという意味ではなく、その都度正しい発音を提示していく必要があるということが教師に求められている。 授業中に子どもたちが「思考する」というのは、教師が提示したやり取りの内容の空欄に提示している単語を埋めることではない。子どもたちが自分の言いたいことを今まで習った語彙や文章を用い、どうしたら相手に伝わるのかを考え、使ってみることが「思考する」ということである。コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、自分の考えや気持ちなどを伝えあう活動を行う必要があることが理解できた。 また、子どもたちは教えたことをすぐに出来るようになるということは考えにくいことを念頭に置き、どこで記録に残す評価を行うのかという、「評価の精選」を教師は行い、評価を行っていくことが大切である。 直山木綿子視学官の名前を見て、この名前はなんて読むのだろうと疑問に思った。調べてみると、ちょうど直山視学官が自分の名前の由来について中学一年生に向けて授業している動画を見つけた。直山視学官の兄弟は姉と兄がおり、姉は4歳の頃に病気で亡くなったということだった。そのあと生まれた子どもであったため、木綿のように強くて健康に育ってほしいとの由来からこの名前が名付けられたということだった。読み方は「ゆうこ」らしい。この自分の名前の由来を英語で話しているにもかかわらず、とても引き込まれる授業だった。使われている単語も、家族にまつわることば、病気になったことを咳をするジェスチャーを用いて伝えたりしていた。直山視学官の話し方は評価にまつわる動画を見たときにも、隣につらつら書かれている文字より直山視学官の顔を見てしまうくらい印象的な話し方をする人物であると感じた。「ハンドブック」を何度も少し苛立つ独特な読み方をしてそこが妙に気になってしまったりしたが、「なんだこの人！」と感じさせる癖が強いが、面白い人物であった。大城先生は評価にまつわることを学ぶためにこの動画を私たちに視聴させたというのももちろんあると思うが、直山視学官の何とも言えない独特の話し方、引き込まれる身振り、声色を学ばせるためにこの動画を選び、提示したのかなとも思った。

②今回の動画を視聴して多く事を知りました。まず、評価を行う意味は｢指導者の授業改善のため｣と｢学習者が自らの学習を振り返り、次の学習へ繋げるため｣の2点が重要だと考えられています。教科外国語は｢聞くこと｣、｢読むこと｣、｢話すこと[やりとり]｣、｢話すこと[発表]｣、書くことの5領域と｢知識・技能｣、｢思考・判断・表現｣、｢主体的に学習に取り組む態度｣の3観点で具体的な評価の基準を設けていきます。｢思考・判断・表現｣｢主体的に学習に取り組む態度｣は一体的に評価を行うことができます。次に、単純に指導要領に基づいて評価基準を設けるのではなく、生徒の実態に合わせて評価を行うことが大切であるということです。例えば、動画内の例でもあったように、小学校の5年生（まだ外国語の教科に入ってまもない頃）の段階では、評価の領域を｢聞くこと｣｢話すこと[やりとり]｣のふたつに絞っていました。また、小学校のレベルにあった評価をしていくことが大切です。外国語の中学校では、文法も学習内容に含まれますが、小学校の段階では、文法ではなく文構造と記されています。その段階で評価の中に文法を組み込んでいくことはできません。しかし、間違いは適宜正していく必要もあります。 今回の動画を視聴して評価の設定の仕方については理解できましたが、具体的な指導の仕方でいくつか疑問に残りました。文法の間違いは評価として記録に残さないにしても正していく必要があると仰っているところで、子どもが｢I like dog.｣と言った所を、｢Ah, you like dogs.｣と直すとしても子どもたちが今のどこが間違いだったのか、どうして｢I like dog.｣が正されたのか理解出来るのかが不安になりました。また、子どもたちに授業内で思考するために、ただ先生が設定した会話文を読み合うだけではダメだともおっしゃていました。｢思考｣では英文までも子どもに考えさせ、伝えされるのだということは理解できますが、果たして知識のまだ充分でない段階でその指導が可能なのか、場合によっては先生が英文を設定してあげることも大切なのではないかと思いました。具体的な指導へ持っていくには、まだまだ疑問に残ったり、不安になる要素も多くあります。 今回の動画はすごく分かりやすい説明をされていて見やすい内容でした。残った疑問について自分なりに考えて、より良い授業評価が出来、指導に繋げていきたいです。

③外国語が教科として認められている今、指導と評価の一体化を図る必要があることを学んだ。目標を定めて、そこに向かうために、子どもたちは思考力・判断力・表現力を働かせ、どのくらい知識・技能がついたのか、また、学びに向かう態度を、話す、聞く、書くという様々な方法で評価できると学んだ。また、その評価方法は、単元の学習内容によって、変えることもできると学んだ。動画で印象に残った所は、思考力・判断力・表現力では、場面に応じて目的を達成するために、子どもの気持ちも伝えながらコミュニケーションを取ることが大事だと述べていたところです。先生があらかじめ定型文を表示し、その一文の一か所を変えて英語を話すだけでは、子どもの思考力は働いていないことが分かりました。具体的には先生が「I like ( ).」という文を提示して子どもが括弧に単語を入れて「I like piano.」という文を完成させて子ども同士でコミュニケーションをとる活動では、子どもは括弧の中に何の単語を入れようかと考えているだけである。子どもはその時、好きな物はなかったり、はやく給食が食べたいと思っていたりするかもしれない。子どもたちに思考力を働かせ表現してほしいのは、子どもの内にある気持ちである。そのために、先生が定型文を示すのではなく、「英語を使って挨拶をしよう」「今感じていること、考えていることを話そう」と定めたら、子どもたちは、自分の気持ちを英語で表現しようとして、そのときにわからない言い回しや単語に気づき、友達や先生に質問したり、調べたりできるのである。文構造を習得してそれを使ってみるという流れだけでなく、感じたことや考えたことを英語で話そうとするときに文構造や単語を習得し、それを表現するという流れも大事であると考えた。そして、後者の方が、子どもたちの主体的な外国語の学びであり、知識習得の確実性も高まるのではないかと思う。また、子どもが「I like dog.」と表現したときに　dogをdogs に変えて「You like dogs.」と返してあげることで、子どもたちは間違えていたことに自然と気づけると述べていたところは、学習指導要領の指導事項にないことも、将来の子どもの学びに繋げるために、教えてあげることが大事だと思った。

④学習評価の目的は、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためだと他の授業で学んだが、今回の動画視聴を通してより深く学ぶことができた。また、児童が目標を知り、頑張りが実感できるような評価をしなければならないので、児童が目標を把握できるように教師は単元の学習を通してどのような力を身につけて欲しいかを明確にして指導にあたらなければならないと感じた。また、評価基準を作成する際は単元の学習目標をよく確認し、その単元を指導する時期に応じて評価する領域を判断しなければならないと学んだ。小学校の高学年外国語では、文構造を取り扱うが文法は取り扱わないので児童がI like dog.と言っても知識・技能の観点から〇にすべきだが、間違いを直すときは、dogではなくdogsだと直接教えるのではなく正しい言い方を自然な形で何度も聞かせ、児童が正しい言い方に気づけるような手立てが児童にとってよりよい学習につながると動画視聴を通して感じた。今回の動画を視聴して初めて学習評価参考資料があること、目標に向けて指導はするが評価の対象にはしない内容があることを知ったので、評価する項目を正しく吟味し、子どもの英語に対する意欲を損なわないためにも学習指導要領以外にも指導や評価に関する資料をよく読み、教科や学習内容に対する理解を深めたいと考えた。思考・判断・表現力等の学習評価をするときに授業の中で子どもに思考・判断・表現する機会を与えなければならないことは、当然のことではあるが見落とされがちなことなので授業をつくる際は子どもが自分の考えや気持ちなどを伝え合う活動になっているかを忘れずに意識していきたいと感じた。また、「主体的に学習に取り組む態度」の2つの側面は、それぞれ独立したものではなく児童が目標に向けて自らの学習を調整し、粘り強い取り組みを行うように密接に関わっていると学んだので、1つの単元内で「主体的に学習に取り組む態度」の評価を終わらせるのではなく、その後の単元でどのような態度が身についたかを含めて学習評価をしたいと考える。

⑤書くことの領域に関して、記録に残す評価がまだできないから評価基準を設定していないということがわかりました。小学校では、文法は扱わず、文構造を扱う。なので、文法評価はできないが、子どもたちが間違っていたら、直して教えてあげることが必要となってくることを始めて知った。間違っていても、評価の対象が違うことがある。小学校と中学校では評価の対象が異なるので、子どもたちへの評価の対象も理解して、学習を進めていかないと、間違った評価をして、子どもたちの自信を無くしてしまうかもしれないと思いました。 　子どもたちの思考の場面を考えながら授業を行うとは何かを考えらされました。動画であった、模造紙の中で、かっこの中だけを子どもたちが考えるような授業を行っても子どもたちが一見、思考を使ったように見えるが、思考を使っているわけではありません。実際、内容を考えたのは先生であり、先生が決めた内容や、語句を繰り返し言ったり、聞いたりしただけになる。コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、どのような内容を伝え合えば、目的が達成されるかを子どもが思考しなくてはいけないと思いました。思考・判断・表現では、子どもが、適切な語句や表現を考えて、表現して、聞き取れているのか、行われているのか見とる必要があるということを知りました。教師も子どもを評価するときには、様々な側面から見る必要があると感じました。又、その際には、子どもたちが自らできるようになるには、教師の支援が必要であり、支援の工夫も大切になってくると感じました。言葉を身に付けるには時間がかかるので、子どもたちができるようになってから、記録に残るような評価をすることが必要ということを学びました。主体的に子どもたちが活動できているかどうかは、本質的に見ないといけないと感じました。子どもたちが手を挙げているだけが、主体的ではなく、子どもたちが自ら目標を立て、その目標を達成するように自ら、考えてもっとやりたいという気持ちでできているということが子どもたちが主体的に行うという一面ということを改めて、認識することが出来ました。

⑥今回、「学習評価」についての動画を視聴して、小学校の外国語の授業ではどのように評価をしたらよいのか、他教科と違う点などを知ることができました。私たちが小学校の時には外国語が教科となっていなかったため、以前グループセッションを行った際にも、「自分たちが受けたことないから、どんな風に授業で評価するかわかんないね」と話していたので、実際に事例を挙げながら、細かな違いなども見ることができてよかったです。これから今回学んだことについて、以下に述べていきます。 まず、私が印象に残ったものは、「記録に残す評価」は、どの時期に、どの単元で、どの領域について評価するかを吟味する必要があるということです。これはどの教科でも同じように行うとは思いますが、他教科では履修する学年以上のことは行いませんが、外国語では、きれいな文法や表現などは、先取りのようなことも含まれてしまうことがあります。特に、今回では、『「読むこと」「書くこと」はまだ慣れていないため、授業内で指導はするが、「記録に残す評価」では取り上げない』という部分から、外国語では、その学年以上のことも教えてしまう教科だからこそ、学習指導要領などと照らし合わせて、この単元で押さえて欲しいところをしっかり教師が理解しておくことが重要だと感じました。 次に、「児童が誤った文法で話していた時にはそのままにせず、指導者が正しい言い方を自然な形で何度も言い聞かせ、正しい言い方に気付かせるようにすることが大切」という点です。これは、講義内でも触れられていましたが、小学校では文構造は習うが、文法自体は習わないため、複数形にするなどの誤りは、指摘するのではなく、教師が正しい言い方で発言を取り上げ、児童に自分のいい方との違いを気付かせるようにして理解してもらうことが大切だと知りました。 　今回「学習評価」の動画を視聴して、これまで疑問に思っていた部分や、新しい見方も得ることができました。児童が学ぶべき項目を教師が理解したうえで、評価をきちんと行っていきたいです。

⑦学習評価のあり方は、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことが出来るようにするために重要だとありましたが、記録に残す評価を行っていくのは、子どもたちができるようになってからとあったので、教師は自身の指導改善のためにも、子どもたちの授業での取り組みの様子をしっかり見ておくことが大切なのだと感じました。しかし、子どもが目標を達成する姿を 　外国語の授業を始めたばかりの子どもたちが書くこと、読むことなどの力を十分に身に付けてない場合は、それに配慮した評価をすることが大切だということが分かりました。子どもたちに合わせた授業づくりというのはこういうことなのかなと思いました。 　知識・技能の説明のところで、子どもがI like dogと文法的に間違えて話した時、文法の間違いを評価することはしないけれど、そのままにはせずに教師が自然に正しい言い方を繰り返して話すことが必要とありましたが、この違いに気づかない子どもたちもいるのではないかと思いました。その場合は、そのままでいいのか、ちゃんと気づかせてあげられるようにしないといけないのかが気になりました。 　思考・判断・表現の説明のところで、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが必要とありました。評価で大切にしている部分が少し違っているということは分かりましたが、内容的にはフレーズが用意されて自分に当てはまるものを答えていく取り組みというのは似ているのかなと思いました。場面を設定するのが大切だということであれば、Helloから始まる例は好きなものとほしいものを話す自己紹介の場面にすると良いのかなと思ったりもしましたが、それをどう評価していくのかと考えると、難しいのかなと感じました。 　評価は、難しいものだけれどそれを行う事で次の学習や、教師、子どもたちそれぞれのレベルアップにつながっていく大切なことだと強く感じました。

⑧動画を視聴して、評価について考えることができた。英語には聞くこと、読むこと、話すこと（やりとり）、話すこと（発表）、書くことの５つの領域があり、学習活動を行う中で記録に残すものとしては、その時期に子どもが十分な能力を身につけることができるかどうかで示さない場合もあるので、こどもの実態を捉えることは重要である。また、小学校の外国語では、文構造を学ぶことはあるが文法について学ぶのは中学校からの目標である。そのため、誤った文法はそのままでいいのかという話があったが、そうではなく誤ったことに対して評価をしないだけで、指導としては訂正して子どもたちにフィードバックし、繰り返し確認することで子どもたちは正しい英語を理解し定着することができるということを学んだ。初等外国語教育法を学ぶ中でこの部分が、ずっと引っかかっていたが今回の動画を視聴して腑に落ちた。思考力・判断力・表現力等の部分では、文章の流れが決められている（　）を埋める活動の場合、考えて表現しているとは言えない。子どもたちが、自分主体で相手のことをよく知るために、質問を行ったり、返答するといったやりとりもって、思考力・判断力・表現力等の力が身につくのだということを学んだ。学びに向かう力・人間性については、粘り強い取り組み、自己調整を意識した学習活動を繰り返し行うことで、学習に向かう力を定着させることができるということを学んだ。そのため、主体的に学習に取り組む態度としても、ただ積極的に授業に参加することが評価の対象となるのではなく、今日、どこがわからなかった、伝わらなかったから次はここを挑戦したいなどの自己調整を行い次の活動にまで目を向けていることも評価の対象となることがわかった。全体を通して、子どもたちの目線で、子どもたちの状況に合わせた場面設定を行い、そこでの子どもたちの姿を学習指導要領に明記されている目標とてらし合わせて評価していくことが大切だということを学んだ。

⑨私は今回、文科省視学官の評価に関する動画を視聴し、学習評価は、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためだけでなく、教師が指導の改善を図るためのものでもあるということを改めて理解することができた。また、今まで私は、評価基準を作成する際は、目標に書かれている全ての活動を評価に取り入れると思っていたが、必ずしも全ての活動を評価に取り入れるのではなく、どの時期に、どの単元でどの領域について「記録に残す評価」を行うかしっかり吟味することが大切であるということを学び、単元の中で目標に向けての指導は行うが、記録に残す評価は行わないこともあるということを知ることができた。さらに、小学校では、文法についての指導はしないが、児童が間違った表現をしたとしてもそのままにせず、指導者が正しい言い方を自然な形で何度も聞かせ、正しい言い方に気づかせるように働きかけることが大切であると学ぶことができた。他にも、小学校の知能・技能の観点では、「音声」の特徴を捉えて話すことについては、それ自体を観点別評価の基準とはしないが、適切に指導を行う必要があるということを学び、評価の基準にしないからといって指導を怠ってしまうのではなく、様々な教材を用いてしっかりと児童に指導していかなければならないということを強く実感した。思考・判断・表現の観点では、コミュニケーション(言語活動)を行う目的や場面、状況を明確にし、児童生徒が自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができるようにすることが大切であるということを学んだ。主体的に学習に取り組む態度の観点では、場合によっては1単元だけで評価をするのではなく、2単元を通して評価を行うことが必要であると学び、必ずしも1単元だけで評価するのではなく、いくつかの単元を通して、児童生徒の取り組みの様子を観察し、学習に取り組む態度を評価していこうと考えた。

⑩評価は、学生の学習改善のための指標になるものというイメージがあった。しかし、評価は教師にも関わるものである。評価は教師の指導改善や学生の学習改善のために存在するということができる。学生に対して授業中に行う評価は、授業そのもの評価につながり、学生の意欲関心態度は、教材や授業の構成や完成度をそのまま映し出しているといえるだとおもった。評価は学生にするものではなく、その評価がそのまま自分が行った授業、教師への評価につながることをとても意識した。 　評価の観点には、単元目標の領域をよく判断して行う必要がある。小学校の外国語教科では、読んだり書いたりがまだ十分にできない可能性がある。学生の学習の達成度や理解度を吟味しながら、書くことや読むことの評価を除くことも検討するとよいとあった。また、小学生は文構造を学習し、中学生は文法を学ぶ。このことより、小学生の文法のミスは評価に入れずに、自然な形で正しい文法を教授することが求められる。そして、子どもが意欲的に発言し、英語を使う姿勢を評価すべきである。私が学生のころは、中学生から外国語英語が教科とされていて、このような評価の仕方ではなかった。初めて触れ合う外国語に戸惑いながら、使うにしても文法のミスや発音の曖昧さから英語を使うことを恐れることが多々あった。この経験から考えても、小学生のうちから英語を教科として捉え、文構造の意識、積極的に英語でのコミュニケーションをとる姿勢を育めるので、小学校の英語はとても重要だと感じる。 　英語の学習評価は、活動とともにすぐに与えることで、学習意欲や自信につながると考えられる。子どもの英語を使おうとする姿勢やその発言に対して随時評価していくのが大切だと思う。また、教師も子どもの学習しやすい教材づくりや授業を子どもに対する評価を自分の評価としてうけとり取り組むことが大切だ。

⑪今回の期末課題では、学習評価について学びました。まず、学習評価は教師が指導の改善を図るためと、児童生徒が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために行うと学びました。また、学習評価の観点として、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む姿勢の3つの点があると学びました。知識・技能の観点では、子どもが言語材料を正しく使っているかを見取ることが必要だと知りました。思考判断表現の観点について説明している部分は特に印象に残りました。なぜなら、私も小学生から高校生までの外国語活動で、先生が決めた英文を読み、(　)に入る部分だけ考えるという活動をずっと行ってきたからです。確かに、途中で英文を覚えることができなくなり、何度も黒板を見ながら活動を行っていました。このような活動では、子どもが主体的に自分の伝えたい英文を考えてコミュニケーションを取ることができないと考えます。実際、このような活動を私はずっと行ってきましたが、今自分の思っていることを英文にして相手に伝えようとしても、英文を思い出すことができず、伝え方に困ってしまいます。子どもが主体でなければ、子どもの学習も浅いものになってしまうということがわかりました。これら観点を子どもたちの活動から見出すために、適切な授業の目標や内容を設定する必要があると考えます。今回の動画で、評価に関することは理解できました。疑問に感じたことは、子どもの主体的な活動に教師がどこまで干渉するかです。思考判断表現の観点の説明のとき、教師が決められた正しい文法を与えてしまっては、子どもの主体性を損なってしまうと学びましたが、ある程度教師が正しいことを与えなければ、子どもが正しいことを学習できないのではないかと思いました。どこまで教師が子どもの主体的な活動に干渉していくのかを考えていかなければならないと感じました。

⑫学習評価では、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることが特に重要だとわかった。これは講義でも繰り返し聞いていたが、改めて評価をする意義を確認することができた。また、ビデオを視聴して、学習指導要領の具体的な見方について学ぶことができた。今までは何となく目を通していたが、学習指導要領には初めに目標があり、次に各言語の目標及び内容等、英語の目標があって、その下に5領域について記されていると知った。そして、これらを評価する時は時期、単元、どの領域について記録を残すか吟味する必要があり、その評価場面も精選する必要がある。評価基準は目標を達成する子どもの具体の姿であるが、１時間目でそのような姿が見られるわけではないからだ。それから、ビデオではあまり良くないとされる指導例も紹介されていて、自分も注意しようと思えた。「①Hello. ②Hello. ①What ( sport / food ) do you like? ②I like ( ).」という会話形式を黒板に示し、児童に真似させる指導だ。これでは教師が決めた内容について、教師が決めた語句や表現を用いて話しをさせているだけだと指摘されていた。講義でも重要なこととして繰り返し聞いているが、やはり児童自身がコミュニケーションを行う目的や場面を把握し、状況などに応じて自分が伝えたい内容を思考することが大切だと再確認することができた。最後に「主体的に学習に取り組む態度」について、これには「粘り強い取り組み」を行おうとする側面と「自らの学習を調整(＝自己調整)」しようとする側面の２つがあると知った。児童、また私自身も「粘り強い取り組みを行う中で、自己調整が働いていく」という学習のサイクルをまわすことを意識して、評価をしていきたいと考える。

⑬動画を見て、今まで授業の中で何度も聞いた「小学校の外国語の教科化」がよりイメージできたと思います。小学校中学年までで学習する「話す」「聞く」と高学年で学習する「読む」「書く」をスムーズに繋げていくために、はじめから英語の文章を読むのではなくて英語の会話を通して音声を聞いて充分に慣れ親しみ、リズムを覚える。そこから、英語の規則を推測するようになり、アルファベットの認識ができるようになる。という流れを終えてからやっと「読む」「書く」ができるようになる。ということを実際に問いかけの仕方を例に挙げて説明していたので分かりやすかったです。 　また、この講義の中で大城先生が、学力を上げるための学習ではなく子ども達がコミュニケーションを取るために学びたいと思う英語の授業をするべきと話していた内容と少し似ていて、コミュニケーションを取るための英語の授業にするための大まかな流れが示されていました。これまでのこの講義の学習内容をどのように教室で子ども達に教えていくか少し想像できたと思います。 　また、琉大付属小学校で取り組んでいた授業のようにパンフレットなどを用いて、日常生活と英語の授業を結び付けて必要性に気づかせるという工夫も挙げられていて理解しやすかったです。 　そして、自分が一番気になっていた“どこまでの英語を教えるか”というところは小学校の英語ではあくまでもアルファベットに慣れ親しむ。本格的に読めるようになるのは中学校になってからということも示されていたので教えるレベルがはっきりしてきました。 　まだ実際に英語の授業をしたことがないのですが少しづつ、小学校の英語では英語に慣れ親しみ、コミュニケーションを取ろうとする姿勢を育てることが最も大切だということが分かってきました。これからもっと具体的な指導の方法などを知っていけたらなと思います。

⑭評価は、学生の学習改善のための指標になるものというイメージがあった。しかし、評価は教師にも関わるものである。評価は教師の指導改善や学生の学習改善のために存在するということができる。学生に対して授業中に行う評価は、授業そのもの評価につながり、学生の意欲関心態度は、教材や授業の構成や完成度をそのまま映し出しているといえるだとおもった。評価は学生にするものではなく、その評価がそのまま自分が行った授業、教師への評価につながることをとても意識した。 　評価の観点には、単元目標の領域をよく判断して行う必要がある。小学校の外国語教科では、読んだり書いたりがまだ十分にできない可能性がある。学生の学習の達成度や理解度を吟味しながら、書くことや読むことの評価を除くことも検討するとよいとあった。また、小学生は文構造を学習し、中学生は文法を学ぶ。このことより、小学生の文法のミスは評価に入れずに、自然な形で正しい文法を教授することが求められる。そして、子どもが意欲的に発言し、英語を使う姿勢を評価すべきである。私が学生のころは、中学生から外国語英語が教科とされていて、このような評価の仕方ではなかった。初めて触れ合う外国語に戸惑いながら、使うにしても文法のミスや発音の曖昧さから英語を使うことを恐れることが多々あった。この経験から考えても、小学生のうちから英語を教科として捉え、文構造の意識、積極的に英語でのコミュニケーションをとる姿勢を育めるので、小学校の英語はとても重要だと感じる。 　英語の学習評価は、活動とともにすぐに与えることで、学習意欲や自身につながると考えられる。子どもの英語を使おうとする姿勢やその発言に対して随時評価していくのが大切だと思う。また、教師も子どもの学習しやすい教材づくりや授業を子どもに対する評価を自分の評価としてうけとり取り組むことが大切だ。

⑮学習評価の意義は、「児童の学習改善につながるものとなること」「教師の指導改善につながるものになること」の２つあることが分かりました。教師は、授業をこなしていくだけではなく、評価をみながら児童の反応を振り返ったり理解度を把握したりして今までの授業を次の指導につなげていくことが重要なのだと感じました。また、児童自身も今までの学習を振り返って自ら課題を発見したり、自分の成長を実感したりできるよう、評価を分かりやすく視覚化することも大切なのかなと考えました。 　評価規準については、動画の中で「読み書きの指導が十分でない段階では書くことの領域に関して評価規準を設定していない」と言っていて、学習の時期やクラスの子どもの英語力に応じて柔軟に設定を考えることが大切だと学びました。またそれは、書くことの領域を指導しないということではなく、単元における目標に向けて指導は行うけれど、記録に残す評価は行わないということだと知り、楽しみながら徐々に外国語を身に付けていけるような工夫をすることが求められると感じました。 　また、思考・判断・表現の観点を見取る際、コミュニケーションの目的、場面、状況に応じてどのような内容を伝え合えば目的が達成されるのかを子どもが考え、表現することが重要だと分かりました。語句や表現、会話のパターンを教師が一方的に提示し、繰り返すような活動では子どもの思考力が育たないと学びました。しかし、語句や表現などを教師が教える場面も多少は出てくのではないかと思い、紹介の仕方やどこまでを指導するのかのラインが難しいなと感じました。 　外国語の授業では、コミュニケーションを取って友達や教師と学んでいくことがとても大切になると思い、緊張せずに楽しく参加できるよう、教師自身が楽しみながら目標や評価規準を明確に把握し、授業を作っていきたいと感じました。

⑯学習評価をする意義として、指導者の教師が指導改善につなげるため・活かすために行うことと、学習者である子どもたちにとって自分の学習改善につながるものであるということが大前提としてあることを学んで、それを念頭に置いて評価していく必要があると感じた。また、ある観点について、それがすぐできるようになることは難しい。だから、どの時期にどの単元でどの領域について「記録に残る評価」を行うかを判断し、子どもたちができるようになってから適切に評価していくことが大事なんだなということを学んだ。 　目標に書かれているとしてもそれが必ず評価する項目につながるとは限らないし、評価はしないけどその目標に向かっての学習活動を行う必要がある領域もあることを初めて知った。評価までするのか、目標だけにとどめておくのか、そこの線引きが大切だと感じた。また、教科外国語か外国語活動かによっても取り組む領域や評価する領域が異なるから、そこの区別もはっきりしておく必要があると思った。 　今まで私は、学びに向かう力・人間性等（動画では主体的に学習に取り組む態度）の評価では、積極的に授業に参加しているかとか活動をしているかとかで判断するものだと思っていた。しかし、今回の動画を見て、小学校外国語・外国語活動においては、「粘り強い取り組み」と「自らの学習を調整（自己調整）」しようとする２つの側面を評価していくということを知った。また、この２つの側面は子どもたち自身が「自分のここが足りていない」、「このようになりたい」と思い、自己調整を行っているからこそ、粘り強い取り組みができるという、表裏一体の関係があり切り離してみることはできないということがわかり、それらを評価するときには、結び付けてできるようにしたい。 （小林可怜）

⑰今回の動画では自分の視点が変わったことが多かった。一番印象強かったのは「思考・判断・表現」である。挨拶や何が好きか、何が欲しいかなどの例文を、教師と子どもでリピートする形で練習をし、その後子どもたち同士で実際にやり取りしてみるという学習の仕方はよくあるし、動画でもあったように、自分も「何が好きか」「何が欲しいか」の「何」を考え、会話をすることで「思考・判断・表現」ができているのではないかと思っていたため、「この活動で子どもたちが思考している場面はどこか」「このようなことを話すと決めたのは誰か」「こんな内容を話すときにはこのような語句や表現を使うと決めたのは誰か」と聞かれたとき、はっとさせられた。「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、どのような内容を伝え合えば、目的が達成されるかを子どもたちが思考する」ために「思考・判断・表現」の「相手のことをよく知るために」や「自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために」の目的の大切さに気付くことができた。またこの目的を達成するために適切な内容、語句や表現を子どもが考え、判断し、表現することができているかを見取るため、コミュニケーションや言語活動を行う目的や場面、状況の設定がない活動では「思考・判断・表現」という観点では見取れないということを学ぶことができた。 　「主体的に学習に取り組む態度」は学習に対する興味、意欲や何度も手をあげることではなく、何度も繰り返し学習をする中で、「もっと○○できるようになりたい」と思ったり自ら自分の目標を設定し粘り強く学習したりすることであると言っていたが、考え方自体は理解できたがすこし難しいと感じた。

⑱私は、学習評価とは子どもたちの学びの姿勢を成績にして可視化するものだと考えていた。しかし、学習評価は「改善する」という点が1番重要であり、児童生徒の学習改善に繋げるものだけではなく、教師自身の指導改善にも繋げることが出来るものだと言うことに気づいた。 学習指導要領外国語には5つの領域が設定されており、聞くこと・読むこと・話すこと(やり取り)・話すこと(発表)・書くことがある。この中からこの授業内容では何を中心にするかを決め、3観点ほどで記録に残していくのだ。 評価基準は学ぶ学年によっても異なってくると考える。英語を習いたてである低学年に発音を厳しく注意しては、その子どもの学習意欲を下げてしまうことにも繋がる。もし、低学年に指導をするのなら発音などから入るのではなく、「考えた答えを自分なりの英語で表現しようとできているか」など、その子の姿勢などを中心に見ていきたいと考える。しかし、ここで発音が違っていても注意しないのではなく、子どもが出した答えを正しい発音・文に直して先生がオウム返しするようにして答えを訂正するというやり方で子どもに「この言い方は少し違うのか！」と気づかせられるようにしたい。 動画の例でもあったように会話をAとBに分けクラスを歩き回り、繰り返して質問の受け答えをする授業法は私が小学生の頃も何度も使われてきた。しかし、これは教師が会話文を設定してある場所を空白にしただけの型にはめた文章であり、子どもたちが自ら考えて出す答えの自由を奪ってしまう。学びは子どもたちが自ら導き出した時に出来るものであって、教師が誘導しすぎては深い学びには繋がらないのかなと考えた。(阿波連和奏)

⑲今までの初等外国語教育法の授業でも｢評価｣について学んできたのですが、今回この動画を視聴して、より深く学校教育における外国語活動（特に小学校）について考えることが出来たと思います。まず、学習評価の意義について、これまでの私のイメージ、考えだと単に学べているかを評価するだけという感じだったのですが、そうではなく、指導者の指導改善や学習者の学習改善の意図があるということを知ることができました。これを知っているのといないのとでは、将来教員になったときの子どもたちに対する学習評価の内容や質が変わってくるなと思いました。また、ユニット2の事例（｢書くこと｣の評価を除外した事例）や文法の事例で言っていた、子どもたちの能力に合った評価（習っていないことは評価外ということ）をするべきという話にも、とても納得することができました。また、習っていないことは評価しないけれど、間違いはそのままにせずに正解を提示するということも大切なことだと感じました。その他にも、目標と評価対象の区別（発音など）や子どもたちの思考力、判断力、表現力を本当に引き出せているのか、どうすれば引き出せるのかなど、ひとくくりに外国語活動とその評価といっても考えるべきことや大切にすべきことはたくさんあるのだなと思いました。それと同時に、自分が実際教員になって、外国語活動をするときに、これ程のことをすべてこなせるかという不安もできました。もちろん、積み重ねていくことが大事だとはおもうのですが、この動画で提示されていたことがすべてではないと思うので、もっと学んで思索していかなければならないなと感じました。

⑳私が一番気になったのは小学校では「文構造」を、中学校では「文法」を指導するという点である。今までの英語の勉強の中で、複数形が抜けていたりすると自分の命取りになるので、何が何でもミスをしないように勉強してきたせいか、自分自身がすごく違和感を覚える。小学校の内から時間がかかっても文法を教えていたら、アルファベットや外国語という教科に対して難しさを覚えて興味を失ってしまう可能性もあるが、その反面中学一年生になってからも「小学生の頃と違う」と違和感や難しさを逆に感じてしまわないのか、と疑問に感じた部分がある。また、大城先生が「使わない日常会話を英語で使っても意味がない」と仰っていましたが、それと似たような事を動画の中でも言われていて、教師が単に発音させる授業を行うのではなく、きちんとこの会話が子どもたちの英語力育成のためになっているのか線引きをしっかりしなければいけないのだと、改めて教師の授業力について感じた。外国語の学習指導要領を見たのは初めてだったので、詳しい内容を知れて良かった。知識・技能の部分に、「I like/want~」「月日の言い方」などと細かく何の文構造を使って習得するために授業を行うのかが書かれていて、初めて見る者でもとても分かりやすいと感じた。しかし、先程も述べたようにどのような授業を行うのかは、当たり前だが書かれていないので、どのような授業工夫を凝らして子どもたちに身に付けるのかは教師の力量にかかっている。いろんな発想が込められた授業作りを目標に日常生活から種を見つけていきたいと思う。

㉑まずはじめに、学習評価の意義における「学習評価の改善の基本的な方向性」という資料で述べられていた、①児童生徒の学習改善に繋がるものにしていくこと、②教師の指導改善に繋がるものにしていくこと、という2つのキーワードに目が止まりました。私は「評価」という言葉からどうしても、5段階評価のような成績や、出来る・出来ないのような言葉をイメージしてしまいます。しかし、この資料の中では、「評価する」ということが、決して子どもたちを落ち込ませたり、やる気を無くしてしまうような方向に向かっていないような気がして感心させられました。資料を見て・動画を見て、評価することの意義は、次のステップに繋げるための振り返りや復習に活かすためであると気付かされました。 また、目標を立てる時や実際に指導を行う時、子どもたちに全てやカンペキな正解を求めてしまいたくなりますが、時には優先順位を付けて、今一番子どもたちに身につけてほしいことはこれだ！と品定めして、文法などのような項目は直接間違いを指摘するのではなく、ナチュラルに何度も何度も粘り強く教師が訂正し続けることが求められると感じました。 その他にも、子どもが自由に思考・判断・表現する場面を作ることはとても難しいだろうと感じた。実際、今の外国語の授業次数や教師のスキルなどから、子どもが言いたいことを言ったり、知りたいことを知ることができるような授業や指導は現実的なのか？と感じました。でも、自分が児童生徒だったら、こんな授業が出来たらとても楽しいだろうな！とも感じました。

㉒まず外国語の目標について、聞く・読む・話す(やり取り)・話す(発表)・書くの5つであることを再確認したが、「話す」について、やり取りと発表は別物であるということに注意したい。発表は声を発しているので話していることになるが、それはコミュニケーションとはならないことが多数で、どちらかといえば「読む」に近いのではないかと感じる。そのため、発表が堂々と積極的に行える生徒でも、必ずしも英会話の能力が高いというわけではないということを念頭に置いて評価にあたりたいと思った。私自身も、発表における「話す」は得意だったと感じるが、発表に対して英語でさらに質問されたり対話をされたりしたらそのまま上手くやり取りをしていけるかと言われたら多分できなかったので、これら2つの能力は別物であるという意識を大切にしていきたい。また、英語でのコミュニケーションは、やり取りの「話す」の能力だけでは成り立たず、「聞く」能力も必要である。リスニングなどのテストにおいて「聞く」能力を評価することが多いと思うが、相手がいるコミュニケーションの中での「聞く」能力が本当の英会話に必要な能力だと思うので、会話による「聞く」能力を見て評価していくことも必要だと思った。さらに、評価というのは、子どもたちの学習の成果を表すだけでなく、教師が指導の改善を図るのにも重要な役割を果たすことが分かった。生徒にどういった力が身についていて、どんな力が足りないのか、評価をきっかけに教師も指導を見直すということを大切にしていきたいと感じた。（192463A田中千夏）

㉓まず、私が動画内において最も重要であると思ったのは、「目標、指導、学習評価は一体的」だということである。児童生徒にどのような力を身につけさせたいかという指導目標があり、その力をつけさせるために指導をし、それができているかを評価する。「学習評価から指導を見直す」という、教師が生徒に対して学習評価をし、学習状況を把握することで指導に活かしていくことが重要であると感じた。私自身は本講義のようにコマ毎のリフレクションを設けることは大変重要なことであると考えている。これをすることにより、児童生徒自身が自己の学習内容・状況を振り返るとともに、授業の分かりにくかった点を指摘することも可能である。これは、生徒が先生の授業を評価するということでもあり、よりよい指導を行うために必須であると私は考える。また、動画内において小学校では文法項目は評価の対象には当たらず、あくまで文構造を理解していることが評価の対象である、とあった。中学生で教科としての英語を初めて学習したときに最も躓いたのは文法だったから、この評価の仕方は個人的には適切だと思う。ただ、どこまでを文構造と見なし、どこからを文法と見なすかが各教師によって分かれることがあるのではないかと思った。5領域3観点の全15評価項目を学習状況や単元目標に応じ「最初からではなく、できるようになってから評価」する、特に主体的に取り組む態度は「粘り強く取り組む」生徒の姿をみるために長期的な視点を持つことを意識しながら、学習評価に取り組んでいきたい。

㉔今回の動画を視聴して、「学習評価」が単に“子どもたちの授業姿勢や成績を反映するためのもの”というわけではないことを知りました。今までの私は、「学習評価」を“子どもたちが授業や活動を通して、その内容についてどれだけ学ぶことができたかを表すもの”として行なっているのだと思ってきました。しかし、動画内で「学習評価」が“子どもたちが自らの学習活動を振り返り、次回の学習活動へとベクトルをむけるようにするため”、さらには“教師自身の教育指導の改善をはかるため”に行なうものであると紹介されていたことを受け、「学習評価」を受け取る対象が『子どもたち』と『教師』の二者であると考えるようになりました。 また、小学5年生の外国語活動の事例をもとに説明された「評価規準の作成」では、設定した学習目標に記載されていること全てを均等に評価の規準としておくのではなく、その単元を行う時期や子どもたちの発達段階に応じて、どの技能をどれだけ評価するのが適切であるのかを、教師がその都度思考を巡らせてしっかりと評価規準を設定しなければならないということを学びました。 以上のことを受け、私は動画視聴を通して「学習評価」及び「評価規準」について学ぶことができました。これらを今後の授業案作成やその他の活動で生かすことができるように、自分でも「学習評価」や「評価規準」を考えてみようと思います。

㉕単元の目標に「相手の情報を聞き取ることができる」、「伝えることができる」、「文字を書くことができる」と3つの領域が含まれているが、評価では「相手の情報を聞き取ることができる」、「伝えることができる」の2つの領域しか評価しないということに疑問を持ちました。評価する領域ではないのなら、この単元で文字を書くことをしなくてよいと思ったからです。でも、評価は子供たちの状況によって変わるのだと知りました。5年生のユニット2だとまだ外国語の授業を始めたばかりで外国語になれていない子供たちが多いので、文字を書くことは評価はしないが、文字を書く練習はするのだと考えました。また、先生の判断で2領域の評価を3領域の評価に変えてもいいということも知りました。外国語活動が盛んな学校だと文字を書くことを評価に加えられると思いました。 文構造と文法の違いについても知ることができました。小学校だと「This is book.」でも「This is a book.」でも評価としては○であることが理解できました。文構造の評価としては○だが、文法としは間違っているので、正しい文を教える必要があります。この際に「その文違う」と直接言うのではなく、正しい文を先生が繰り返すなど間接的に伝える方が良いのではないかと思いました。

㉖今回この動画を視聴して、いままで私たちが受けてきた外国語活動の授業や、英語の授業を教師が行う評価という観点から考え直すことが出来ました。学習評価は、どの教科でも必ず必要なものですが、実際の意義について、教師の指導改善や子どもたちの学習改善に繋がるものなのだと学びました。知識及び技能の観点では、取り扱う言語材料を示すことと、目標に向けての指導は行いつつも、こどもたちの発達に寄り添った評価の見極めを行うことが、重要だと学ぶことが出来ました。思考・判断・表現の観点では、パートに別れた単純な役割読み等を行うのではなく、こどもたちにどこでどのように思考させるのかを考えることが重要だと学びました。主体的に取り組む態度の観点では、特に粘り強く取り組む態度や自らの学習を調整しようとする態度を伸ばしていくことが重要だと学ぶことが出来ました。また、思考・判断・表現の観点と、主体的に取り組む態度の観点は一体的に捉えることもできるということも学習できました。私たちが今まで受けていた外国語の授業は、5領域全て学習できていた訳でもないし、学習目標に合わない活動自体も多かったのだと気づきました。これからは、学習評価という、授業を作る上でもキーポイントとなる目標の設定と評価方法について、考えていくべきだと感じました。

㉗最後の目標と指導と評価は一体であるという言葉を聞き、確かにそうであるなあと感じた。学習評価については様々な観点があるが、学習指導要領には詳しく目標が記載されておりその目標に沿って授業目標を掲げ、それに合った授業を展開することで記録に残す評価をすることができる。動画の中で印象に残っているのは、前のホワイトボードに模造紙を掲示し、先生の後に続いて読んだり、かっこ埋めをする授業の中で先生に生徒たちが思考した部分はどこかと尋ねると、（）を考えることだと述べていたこと。そして、教師がシナリオを作ってしまうような授業があるということだ。私自身今までそういった授業を受けてきたため、そのような授業について何も疑問を抱いていなかったため、今回の動画や今までの講義を振り返り、外国語教育についてもっときちんと考えるべきだと考えさせられた。そして、児童生徒がきちんと思考し、積極的に取り組めるような授業を作ることがとても重要だと改めて感じた。そのためにも、教師はもっと外国語に触れ、喋ることはできずとも、外国語についての知識をきちんと持っておくことが重要であると考えさせられた。学習評価はとても難しいものであるが、こどもたちの発達段階に応じた授業を展開し、目標、指導、評価を一体化させることを考えることが大切だ。

㉘私は全ての授業で全ての観点を評価しなくてはいけないとおもって思っていました。しかしそんなことは無く、評価する場面を精選することが大事だと気付かされました。また、これまでほかの教科で指導案を作ってきましたが、授業内容でいっぱいいっぱいになり、評価のところは他の指導案を少し変えただけだったりとあまり深く考えていませんでした。今回の動画をみて評価をすることは教師が成績をつけるためではなく、授業の改善のためだったり、児童自身の振り返りのためだったりととても大事だと思いました。そのため一般的なものだけでなく、そのクラスの様子によっては記録に残る評価をしないことを考えることも大事なのだと思いました。 しかし、｢評価はしないが指導をする｣というのが難しいと感じました。通知表などに書く時に評価として加えないというのは出来ますが、授業内で間違えているものを訂正する際に評価をしているような声掛けをしてしまう気がします。どのような声掛けをするのが良いのかが気になりました。｢それは違う。｣と言わず、動画内のように、子供｢I like dog.｣ 先生｢You like dogs!｣というように正しいのを聞かせるのが良いということであっているでしょうか？

㉙直山視学官の評価に関する動画、小学校外国語教科における評価についての動画を視聴して、まずはその意義が学習者自身の学習改善に向けた評価であるという側面、そして指導者の指導改善に向けた評価であるという側面があるということを、評価を行う立場にある私たちがしっかりと理解しておかなければならないと改めて感じました。動画の中で知識・技能の領域、思考・判断・表現の領域、主体的に学習に取り組む態度の領域についての話と5つの技能(書くこと・聞くこと。読むこと・話すことのやり取り・話すことの発表)についての話が取り上げられており、この領域と技能の組み合わせをうまく整理しながら授業実践に取り組んでいかないと評価という活動において、やらなければならないことがはっきりしてこないと思うので、先述した領域と技能の組み合わせをしっかりと勉強していきたいなと思いました。また知識中心の学習になってはいけないという話がよくありますが、評価という側面から見たときに評価しやすい領域に知識というものがあるからだとも思いました。成績をつけるためなどではなく、学習者個人の生きる力をつけていくためのその過程の評価として、意味のある評価を行っていかなければいけないなと強く感じました。

㉚今回の動画から、外国語の授業の学習指導要領を知ることで、何を教えればよいのか、どういう風に教えればよいのか不安だった進め方について知ることができた。しかし、実際の例を見た時に、教師が思考させたいことと授業の内容がずれている場合があることを知った。自分自身もこのような外国語活動の授業を受けてきたので、今回の動画で改めてただ言うだけ、暗記するだけということに気づかされた。教師が学ばせたいこととそれに伴って子ども達が思考する内容にしないといけないと感じた。また、学習指導要領の中でも「話すこと」が重視されているように、外国語活動の内容を重視して作られているような感じがした。また、評価の部分では文法をすぐに評価するのではなく表現などが重視されており、積極性がある子のみが少し有利な感じたしたので、教師のクラスづくりも大切だと考えた。また、疑問に思ったことは、この動画の中で教師は会話の中で間違えているところを訂正していたが、「複数の時にはｓを付けるよ」などの授業の中で確認しても子ども達は意識すると思った。しかし、教師が学ばせたいこと以外を問い入れると子ども達は混乱してしまうのか、私の中でどうしたらいいのか疑問に思った。

㉛動画を見て、外国語が活動から教科になり、新しい学習指導要領に伴って、授業の内容をどのように設定するのかと考えたうえで、学習評価を行うことの大切さを学びました。 学習評価は、指導者が指導の改善を図るということや、学習者が自ら学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために重要だと知りました。評価は学習者（児童生徒）が理解できたかの判断とばかり考えていたが、教師自身も生徒児童にきちんと伝えることができているか判断する大切なものだと気づき、授業を通しての評価の重要性を改めて実感しました。 動画の中の例で、決まったパターンの会話を相手を替えて、言ったり聞いたりする活動が挙げられ、私自身も、小中学生のころの外国語活動でよくやっていたことを思い出しました。決まったパターンの会話を人や少し言葉を替えて行ったとき、言葉を理解し会話しているようで、ただ言葉をフレーズとして覚えており、言葉に対して思考を働かせていなかったと思いました。 このことから、覚えることも大切ではあるが、思考を働かせることを意識した授業を考えて設定していくことが大切で、評価もしやすくなると考えました。

㉜まず、学習の評価は児童の成績をつけるためであったり児童それぞれの課題を明確にするために行うものであると考えていました。しかし、学習の評価を行うことで教師の指導の改善をはかる目的もあると知りました。さらに、児童の実態に合わせて評価の内容も大きく変わることを知りました。あくまでも、教師は児童が目標を達成するためにどのような指導を行っていくかを考える必要があり、児童の主体性を尊重しなければいけないのだと考えました。また、評価の内容を細かく見ていくと(思考・判断・表現)と(主体的に学習に取り組む態度)は言葉の表現が異なるだけで、内容はほとんど変わらないということに驚きました。児童の主体的に学習に取り組む態度を育てるためにも、児童自身で評価を行い課題を見つめ直すということが重要だと感じました。そうすることで、学習に対する意欲を高めることが出来るのではないかとかんがえます。 各単元の学習内容に合わせて評価を変えるのか、全ての領域を含んだ評価を用意する必要があるのか疑問に思いました。

㉝今回の動画を見て、将来自分が教師になった時のことを考えると、今の自分の力量ではまだまだ教師になるのは難しいかなと感じた。子ども1人ひとりの個性、特徴、性格などを把握し、みんな平等に、接することの力量について考えさせられた。教師にとっての子供の評価は他者の目からの評価であるため、私情は交えてはならず、できたことよりも、伸び幅、振り幅を評価したいと私は思う。 また、子ども自身も自分のことを評価し、授業の振り返りをすることで学習の反復を行うことに繋がる。他者評価と自己評価は相互作用で存在しており、どちらも教育の場では怠ってはならないと感じる。自分が教師ななった時、これらのことを踏まえた総合的な評価をできるようになるためには、子どもとの会話を大事にし、テストの点数だけでなくひとりひとりの成長過程を、評価できるようこれからもっと力をつけて、子供の底力、能力を、引き出せるような教師になれるよう勉強、ボランティアなどを頑張りたいと思った。

㉞直山視学官の評価に関する動画を視聴して、学習評価について学ぶことが出来た。まず、学習評価は児童の達成度を測るものだけではなく、教師の指導の改善のためにも大切だということを知ることが出来た。また、外国語活動では聞くことや話すこと、やりとりなどの評価は行うが、書くことや読むことは評価しないということが分かった。外国語を始めて学ぶ小学生への評価の仕方としては、児童の段階を踏まえて適切に評価することが大切だということを知ることが出来た。知識・技能などの評価は、教師が児童に理解しやすいよう絵や身近な例、児童にとって理解可能なインプットが出来るような教材を用意することで楽しくわかりやすく身に付けさせることが出来ると感じた。思考・判断・表現の評価については少し難しいと感じた。動画内での事例は真似することでコミュニケーションを取っていたがそれでは児童の思考・判断・表現が身につくわけではないと知ってとても納得した。真似をすることで知識・技能は見につくと思うが、実際にコミュニケーションを行う時には先生が提示したまんまの言葉が出てくるとは限らないため、状況に応じたコミュニケーションが取れるような指導が出来るようになりたいと考えた。どのような指導法が適切なのかはまだいまいちよくわからなかったため、自分でもいろいろ試しながら考えてみたいと思った。また、主体的に学習に取り組む態度について、積極的に発言したりするだけでなく、粘り強く取り組んだり、学ぼうとする姿勢も大切だということが分かった。皆も前で発表することが苦手だからと言って主体的に学習に取り組む姿勢がないというわけではなく、興味を持って取り組むことが出来た児童に対して褒めてあげたり評価しながら目標を達成することが出来るよう指導することが大事だと考えた。